	テーマ	主な内容
1	キリシタン史概要と前史	1549 年以前のキリスト教の影響を含め、キリシタン史全体を概観します。
2	ヤジロウとザビエルの来日	ザビエルが、マラッカでヤジロウと出会い日本宣教を志した経緯と２年強に亘る日本伝道の足どりを追います。
3	高山右近ら キリシタン大名	キリシタン大名が果たした功罪と、その中でも、特に影響の大きかった高山右近について学びます。
4	巡察師ヴァリヤーノと適応主義	日本に宣教に来たザビエルとその後継者コスメデトルレス神父や巡察師ヴァリヤーノが採った「適応主義」について学びます。
5	イエズス会の教育と信徒組織	未だ「日本語聖書」が無い時代に、どのように伝道し、教育をして行ったのかを学びます。
6	秀吉の伴天連追放令と迫害	秀吉の九州平定以後、突如、宣教師追放が告げられます。いったい、どんな理由があったのかを学びます。
7	鎖国と徳川幕府による禁教	キリシタンに対する組織的で徹底的な弾圧と、外国との交流を長崎の出島に限る鎖国政策に至った経緯を学びます。
8	潜伏キリシタンと高札撤去	九州長崎の一部や五島列島で、自分たちの信仰を隠しながら守り続けてきた「潜伏キリシタン」について学びます。

キリシタン大名（吉利支丹大名）

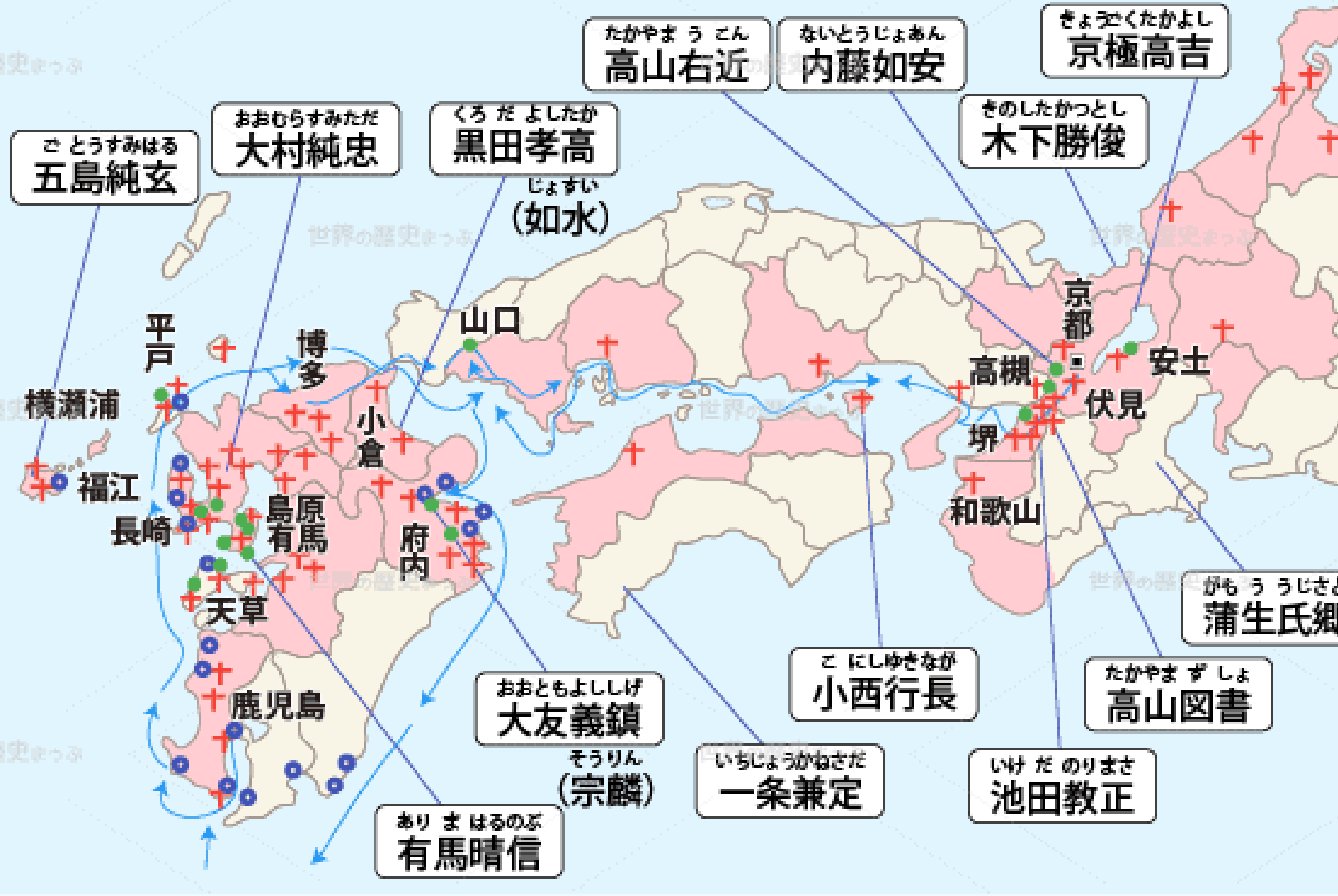
戦国時代から江戸時代初期にかけてキリスト教に入信し、洗礼を受けた大名。

イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルは戦国時代の日本をよく理解し、まず各地の戦国大名たちに領内での布教の許可を求め、さらに布教を円滑に進めるために大名自身に対する布教も行った。

その際、大名たちの歓心を得るために、布教の見返りに南蛮貿易や武器・弾薬の援助などを提示した者もおり、大名側もこうした宣教師から得られる利益をより多く得ようと、入信して歓心を買った者もいた。入信した大名の領地では、特に顕著にキリスト教が広がることになった。

　その後、キリスト教の教義やキリシタン大名の人徳や活躍ぶり（特に高山右近）に感化され、自ら入信する大名が現れ、南蛮貿易に関係のない内陸部などでもキリシタン大名は増えていった。

主なキリシタン大名


五島純玄
ごとうすみはる
大村純忠
おおむらすみただ
黒田孝高
くろだよしたか
(如水)
じょすい
高山右近
たかやまうこん
内藤如安
ないとうじょあん
京極高吉
きょうごくたかよし
木下勝俊
きのしたかつとし
横瀬浦
平戸
博多
山口
小倉
福江
長崎
島原
有馬
府内
天草
鹿児島
京都
高槻
安土
伏見
堺
和歌山
蒲生氏郷
がもううじさと
大友義鎮
おおともよししげ
(宗麟)
そうりん
有馬晴信
ありまはるのぶ
一条兼定
いちじょうかねさだ
小西行長
こにしゆきなが
池田教正
いけだのりまさ
高山図書
たかやまずしょ

宣教資金の調達
南蛮貿易

イエズス会の
宣教資金
（生糸貿易）

戦国大名
武器弾薬購入

相互利益

宣教の資金源と南蛮貿易

1556年　ポルトガル商人　ルイス・デ・アルメイダが私財4,000ドゥガドをイエズス会に寄付（ほぼ1年分のイエズス会の活動費に相当）

⇊

生糸貿易に投資をし、布教費を捻出

⇊

ローマが、イエズス会の貿易活動を問題視

⇊

ヴァリニャーノの巡察の結果、宣教の為不可避と判断

⇊

1579年　マカオと生糸貿易の契約締結、必要経費の3分の2を賄うことができた。

■キリシタン大名と集団改宗（特に九州において）

①南蛮船のもたらす富・武器による富国強兵
②領内への南蛮船の誘致
③その為に布教を許可（自らも改宗）
④領民の集団改宗

たとえ、異教徒であっても、大勢の領主は、領内にパードレたちが身を落ち着け、教会を設け、キリスト教徒を生み出すように尽力する。なぜなら、こうすればナウ船やパードレから、その他のいろいろな利益を獲得できるだろうと、大勢の領主が判断しているからである。日本人は、自分の領主には非常に従順なので、主人がそうするように命じたり、あるいは、それが主人の意思であることを理解したりすると、容易に改宗する。（ヴァリニャーノ）

府内（大分）・大友宗麟

- サビエルの礼儀正しい態度、親切な態度に感銘を受け、領内でのキリスト教を伝道をすることを許可した。
- 当初は禅宗に帰依していたが、後にキリスト教への関心を強め、27年後、カブラルから洗礼を受ける。
- 侵略先の日向において、神の国建設を夢見て、神社仏閣、仏像や経典の類まで徹底的に破壊した。
- 宣教師が伝えた西洋医学の診療所を作り、領民は無料で診察を受けることができた。

西洋医術発祥記念像（大分市）
ルイス・デ・アルメイダ（中央）

長崎　大村 純忠

・1563年、コスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受け、日本初のキリシタン大名となった

・領民にもキリスト教信仰を奨励し、最盛期のキリスト者数は6万人を越えた

・敬虔なキリシタンで、受洗後は妻以外の女性と関係を持たなかった

・仏道や神道に対する深刻な差別や迫害を行った。

・西洋の武器を手に入れる為の取引材料として、改宗拒否をした者達を奴隷として海外へ売り渡していたという記録もある

・1570年、純忠は長崎をイエズス会に教会領として寄進した

・1582年、天正遣欧少年使節団を派遣した。

高山 友照（通称：図書、飛騨守）

キリシタン大名。勇猛で教養もあり、領民にも慕われ、誠実な武士の鑑として知られた。

ヴィレラに代わってロレンソ了斎が議論を行ったが、議論の中で審査役の高山友照と結城忠正はキリスト教の教えに感化され、のちに友照はヴィレラを沢城に招いて嫡子の彦五郎（後の高山右近）をはじめとする家族とともに洗礼を受けた。

高山右近

西暦	年齢	事項
1552	1	摂津高山に飛騨守の長子として生まれる。幼名彦五郎。
1564	**12**	**イルマン・ロレンソより洗礼を受ける**。クリスチャンネームは「ジュスト」。
1573	21	右近高槻城主となり、友祥と称す。荒木村重に属し2万石。
1574	22	**高槻に天主堂**を建立。
1576	24	**京都の南蛮寺**建立に尽力。
1578	26	荒木氏の叛に際し、右近高槻城を開城。信長に従い4万石。
1580	28	**安土セミナリヨ建設**に尽力。
1581	29	巡察師バリニァーノを迎え、高槻に盛大な復活祭を執行。
1582	30	本能寺の変。山崎合戦に先陣。**高槻セミナリヨ**を建つ。
1583	**31**	**小西行長一家、黒田孝高、蒲生氏郷、牧村政治らをキリスト教に導く。**
1585	33	**明石**6万石に移封。
1586	34	準管区長コエリヨを伴い大坂城の秀吉に謁見。
1587	35	九州征伐。6月伴天連追放令。右近、小西行長により小豆島に匿われる。
1588	36	前田利家、右近を**加賀**に引き取る。
1599	47	前田利家歿。右近遺子利長のため大坂に使わす。金沢城修築。
1600	48	関ヶ原役に際し大聖寺を攻める。
1605	53	**金沢に南蛮寺**を建立。
1609	57	利長の命を受け高岡城築城。
1614	62	家康、切支丹禁令、右近の国外追放、金沢より長崎を経てマニラに至りる。
1615	63	2月3日、マニラに病没す。

右近の主君である荒木村重が、毛利、石山本願寺につき、信長に謀反を起こした。信長、秀吉らは進軍し高槻城に迫り開城を要求。ここで右近は難しい選択を迫られる。

- 👉荒木につけば、謀反に加担することになり正義に反する。またキリシタンが迫害される。
- 👉信長につけば、人質になっている妹と子を失う。

右近は、祈って決断する。密かに城を脱出。髪をおろし、武器を捨て、信長のもとへ下った。彼は武士であることを捨て城主は父に返上。その代わりキリシタン保護を願う。正義を貫き、かつ、妹、子の命を救い、そしてキリシタンを守る、そのためには武将としての地位も名誉も捨てる覚悟であった。

信長のキリシタン保護政策は継続され、安土にセミナリヨを建てることを許可した。右近築城の名人とも言われ、家臣１５００人を動員して1カ月で3階建てのセミナリオを建てた。多くの武家の師弟たちがこのセミナリオで学んだ。
　1581年には高槻の領民２万５０００のうち、１万８０００人がキリシタンとなった。教会は領内に２０程あったという。

巡察師ヴァリニャーノが高槻に来て天正４年をしのぐ盛大な復活祭が行われた。グレゴリオ聖歌が流れ、日本で最初に輸入された小型の移動式パイプオルガンが演奏された。ヴァリニャーノ、フロイスも驚嘆した。

1576年、高槻で最初の復活祭が行われ、１年で約４０００人が受洗した。

しかし彼らは決して領主の権限で信仰を強制しなかった。仏教徒にも自由を認め、保証した。あるときには仏僧に、キリシタンになって収入を失っても、生活を保証しようと言って１０人ほどが改宗したこともある。多くの寺社は自然消滅して、その跡地に教会を建てた。寺社を今までどおり保証するという右近の文書も見つかっている。

　信長や当時の武将たちの間でもキリシタンへの信頼は厚かった。あるとき法華宗の者が信長にパアデレ追放を願い出た。信長は荒木村重に「キリシタンについてどう思うか」と聞いた。荒木は「教理についてはよく知らぬが、キリシタンの家臣たちは、よく善に従い、徳を行い、申し分ない。」と言うと、そこに居た武将たちも同意し、信長も「予も同意見だ」といって法華宗の訴えを退けたという。

高山飛騨守ダリヨは高槻城主となったが、まもなく21歳の右近に譲り、ダリヨは引退して、伝道、教会の奉仕、貧者の救済に専念する。

ダリヨは自宅を解放して連日のようにミサと説教が行われた。 ダリヨは元神社のあった景勝地に天主堂、司祭館、宿舎を建設。洋風を加味した日本庭園をまわりにつくって、ダリヨ自身も毎日、手入れと掃除を行った。ダリヨはパアデレの説教をかみ砕いて庶民に教えた。毎日早朝に鐘がなり、毎日、朝と夕に教会に集まり、祈りを捧げた。ダリヨとジェスト（右近）は、雨の日も風の日も真っ先に教会に顔を見せた。

フロイスの日本史には次ぎような逸話が見られる。
当時、葬儀のとき、棺をかつぎ、墓を掘るのは、賤民の仕事であったが、ある貧しい者が亡くなったとき、高山親子は自ら棺をかつぎ、これを見て感激した武士たちが争って鍬を取り、墓を掘ったという。それ以来、領民の葬儀には武士が援助する習慣になった。

フロイスは「自負心の強い傲慢な日本人武士にしては稀に見る行為である。」と評している。このようにして、彼らは人間の平等であることを示した。またキリシタンは一夫一婦制を厳格に守り、女性の人権をも守った。彼らは領主とは思えぬ謙遜な態度で領民に接した。

右近は、利休七哲の一人であり、千利休を含め、彼の多くの弟子たちにキリストを伝え、何人もの人をキリスト教に導いた。ロドリゲス宣教師は、右近の茶室は祈りの間であり、茶を饗しつつ友と人生を語り、信仰を語ったと述べています。

大坂を中心に天下が動くことを予測した右近は、何はさておき大坂に教会を建てなければこれからの宣教が閉ざされると考え、大坂での教会建設許可と土地の提供を願い出るよう進言した。秀吉は天満橋付近の見晴らしのいい二千坪もの土地をオルガンティーノに与えた。大坂に壮麗な南蛮寺が完成すると、右近はすぐそばに自らの館を建て、諸侯や貴人を教会に案内したり、教理を説明したりして宣教に努めた。

牧村兵部や、後に会津百万石を領することになる親友の**蒲生氏郷**らを信仰へと導き、氏郷の古くからの盟友である**黒田孝高（如水）**や、利休七哲の一人、**瀬田掃部**も洗礼を受け、**古田織部**も右近を通じてキリスト教に深く感化された。

「神父が金沢へ行ってみると、ユストの費用で建てた聖堂があった。ユストはその一家と共にキリスト信者らしい生活をしていたので、人々は彼の善徳を高く評価していた。僅かな日時の間、百二十余人の武士に洗礼を授け、その中の十二、三人は前田利長の重臣である。」（パジオ神父の書簡）

右近は「信仰の炎」と呼ばれていた。蒲生氏郷、黒田孝高などの大名をはじめ、高槻の領民約二万人、明石の領民約三万人も、右近を通して信仰を得た。右近の国替えや追放は、いつも教会の誕生と発展へとつながって行った。

高槻から始まり、明石、金沢、能登と右近が移り住む先々で教会が誕生し、共同体が成長していった。その土地で右近の信仰の炎に触れた人々が、中津、小倉、熊本、大分、会津などで次々と教会を立て、信仰共同体を作って行った。その意味で、右近の数度にわたる追放は、実に摂理的であったと言えるだろう。

高槻城の右近像

高岡（金沢）城の右近像

マニラの右近像

織田信長の庇護のもとに建てられた「南蛮寺」（京都）
狩野宗秀（1551-1601）作「都の南蛮寺図」

1575年　祭司オルガンチノは、高山右近らの協力を得て3階建ての聖堂を建設
◇全体で、百畳敷き

1587年　秀吉の伴天連追放令により、取り壊れた。

旧南蛮寺の鐘
イエズス会の紋章
IHS
Iesus Hominum Salvator
「人類の救世主イエス」
の頭文字

京都市左京区
妙心寺
春光院
保存

ヨハネ 5:35

ヨハネは燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で大いに喜ぼうとしました。